長崎川棚医療センター広報誌









vol. **88**

『さわやかな笑顔と思いやりの心で、安心、安全な満足される医療をめざします』 そのために、患者さんは言うまでもなく全職員ひとり一人を大切にします。

088 外来カンファレンス室

●ようきけんとは「病む人の病のみならず心をも癒すことの出来るところ」という意味です。



外来カンファレンス室をリメイクしました。

外来では患者さんが安全に、また安心して診療、検査、治療を受け、そして 住み慣れた地域で不安なく在宅療養を続けられるよう看護を行っています。 外来採血室と整形外科外来の間に『外来カンファレンス室』があります。

ここでは、糖尿病患者さんへの生活指導を実施したり、コロナ禍となる前は 患者さんや地域住民の皆さんと医療スタッフの交流の場として、さくらカフェ (認知症カフェ)を開催していました。

コロナ禍が終息したら、さくらカフェを再開し、また医師や看護師、患者さん・ ご家族、ケアマネージャー、周辺介護保険施設スタッフ等を交えた多職種カ ンファレンス等に大いに活用していきたいと考えています。

交流の場としては殺風景だったカンファレンス室内に、グリーンを配置し「癒し」と「暖かさ」を提供できる部屋としました。皆さんどうぞご活用ください。

(外来看護師長 毛利 由加) < <



手指衛生の遵守率向上への取り組み

6階病棟看護師長 中村 佳永子

感染対策の原則は、感染成立の3要因への対策(① 病原体(感染源)②感染経路③宿主)と病原体を持ち 込まない・持ち出さない・拡げないが基本です。

感染を防ぐためには、手指衛生遵守率の向上が欠かせません。手指衛生に対するスタッフ一人ひとりの実施や意識も大きな意味を持ちますが、手指衛生遵守を組織として推し進めることも大切です。

6階病棟では、手指消毒率向上の取り組みとして、 毎日の朝礼時に手指消毒の5つのタイミングの呼称、イ ラストを見ながらみんなで手指消毒の基本動作の確認 をしています。

医療従事者が感染拡大の原因とならないように手指消毒の徹底を引き続き行っていきたいと思います。





T o p i c s 【トピックス】

「3学会合同呼吸療法認定士」について



8病棟看護師長 酒井 真澄

8病棟の入院患者60名のうち46名が人工呼吸器を装着しています。私もこの病棟に来て台数の多さにまず驚きました。終日装着する方や夜間のみ装着する方など症状に合わせてそれぞれですが、これだけの台数を管理することは、日々緊張の連続です。勤務するスタッフは人工呼吸器に関する知識・技術のスキルを日々高める努力をしています。

さらに病棟には3学会合同呼吸療法認定士の資格 をもつ看護師が2名勤務しています。この資格は、呼吸 管理を行える医療人材のレベル向上と維持を目的として認定され、主な役割は、呼吸理学療法や吸入療法、酸素療法などの呼吸療法の的確な実施と、その機器を管理します。病棟では、人工呼吸器を装着している方の安全・安楽を優先した看護の提供を実践するスペシャリストとして、活躍しています。3学会合同呼吸療法認定士の資格をもつ先輩看護師につづく後輩たちを一人でも多く育て、人工呼吸器を装着する患者の看護の質を高めていきたいと思います。



手術室の術前・術後の取り組み

手術室看護師長 松尾 多美子

手術は患者さんやご家族にとって大きなライフイベントであり、手術室に来られるほとんどの患者さんは緊張した状態で入室されます。

術前訪問では、手術室入室からの流れを説明し、当日も一つ一つ患者さんの表情を見ながら説明し、不安

や緊張を和らげられるようにしています。また、事前に手術の体位で苦痛がないか、例えば膝の下のクッションが必要な場合は、その大きさや形まで確認して準備しています。



また、患者さんが少し でもリラックス出来るよう に好きな音楽を聴取し、

BGMとして使用しています。

術後訪問では、術後の経過と共に手術室で行った看護について評価を行い、術後病棟での看護・観察が継続して行えているのか確認を行いながら、病棟と情報を共有しています。

今後も患者さんの痛み・寒さ・緊張・不安など、苦痛 となりうるものを出来る限り取り除き、安全で安楽な満 足のいく手術につなげていきたいと考えています。

opics [トヒックス] 頑張ったで賞

管理課長 山口 博司

「頑張ったで賞」とは、2021年最も顕著な功績をあげた 職員・部署の院内表彰です。表彰を行うことで、職員のモ チベーション向上につながり、さらにより良い病院になるこ とを目的としております。

2021年に表彰された部署は以下の通りです。

- ●6階病棟
- ●感染症内科部長、検査科
- ●栄養管理室
- ●医療機器管理室
- ●企画課

2022年も職員一丸となり、地域医療に尽くします。













診療科紹介(消化器内科)

副院長 植木 俊仁

消化器内科は消化器疾患 (消化管及び肝胆膵疾患) を検査し、内科的に治療する診療科です。消化管検査 は、食道・胃及び大腸内視鏡検査を行っています。

胃内視鏡検査は年間約700例、大腸内視鏡検査は 年間約500例施行しています。 消化管疾患の治療とし ては、食道・胃及び大腸の内視鏡的ポリープ切除術、 内視鏡的粘膜切除術などです。

肝胆膵疾患の検査としては、腹部超音波、腹部CT、腹部MRI検査などに加えエコー下肝生検、逆行性膵胆管造影検査なども行っています。

肝胆膵疾患の治療では、C型肝炎等に対する内服治療や総胆管結石に対する内視鏡的乳頭切開、破石術

や閉塞性黄疸に対する内視鏡的ドレナージ術、ステント留置術なども行っています。

安心・安全な診療を日々心がけて、消化管・肝疾患 の検査および専門的治療を行ってまいります。



T o p i c s 【トピックス】

部署紹介(訪問看護ステーション「さくらそう」)

管理者 浦部 優子

訪問看護ステーション「さくらそう」では、病棟看護師が曜日ごとにさくら登録ナースとして、訪問を行っています。昨年2月1日からさくら登録ナース制度を開始して、1年が過ぎました。

さくら登録ナースの強みは、利用者の方に入院中から関わることができ、また病棟スタッフと情報共有を行い、必要な援助や退院を見据えた関わりができることです。さくら登録ナースは、在宅での経験を病棟での退院支援に役立てています。退院前には多職種カンファレンスに参加し、ご本人、ご家族のご希望を聴き、退院後に在宅で安心して過ごせるように検討しています。

今後も病棟との連携を深め、訪問看護を実践してい きたいと思います。



編集後記

企画課長 出良 和之

冬季オリンピックが北京で開催され、日々、熱戦が繰り広げられています。輝かしい成績から溢れんばかりの笑顔の選手が報道される一方で、競技以外の理不尽な出来事により涙ぐむ選手がクローズアップされています。フィギアスケートの羽生結弦選手もその一人です。ショートプログラムの最初のジャンプ、4回転半に挑んだ瞬間、リンクの穴にはまり失敗。結果、8位と大きく出遅れてしまいます。その後のフリープログラムでは、魅了あふれる演技を披露し、観ている者に感動と勇気を与えていました。リンクに穴という理不尽な出来事に対し抗う姿、最後まで戦い立ち上がっていく姿に共感を覚えました。

振り返ると、我々も新型コロナウイルス感染拡大という 理不尽な出来事に日々戦っているところです。また、4 月には診療報酬という理不尽な制度に立ち向かってい かなければいけません。改正により看護必要度や人員 配置等の基準が見直されると、改正内容に沿った診療 体制をしなければなりません。毎回ですが、この理不 尽な改正に病院の運営は振り回されることになります。 2022年は、新型コロナ感染第6波にはじまり、理不尽 な出来事に振り回される年かもしれません。羽生選手 のように最後まで抗うことができるようになりたいと思 いながら「養氣軒」校了に向けて、この編集後記と抗っ ています。